
シンポジウム

「地域共生社会に向けて」～障がい者の立場から

The 29th Tohoku Occupational Therapy Congress in Yamagata

障害当事者の観点からの「地域共生社会に求められる『作業療法士及び他の専門職との連携』について」の一考察

齋藤 直希

政策研究ネットワーク 山形 運営委員



過去、私自身も現在の「こども医療療育センター」でのリハビリ等において、今は母親も訪問リハビリ及びデイサービス等で作業療法士の皆様と関わっております。その経験上、私の言葉で「作業療法」を表現させて頂くと、「医療やリハビリ、その他様々な場面において『生活の中で患者自身のできる事を増やせる』ような指導や支援」となり、その医療専門職としての存在が「作業療法士」と思量します。その中で「自分でできる事」を増やす或いは維持するという事は、患者自身も主体的なやる気を伴って行わないと、より良い結果に繋がらないと推量します。故に「作業療法士」の方は、患者様の「心の部分」についても深く理解する必要があります。よって広義的観点の「良い作業療法」の為には、医師、看護師、理学療法士他等の様々な医療専門職の皆様との連携は当然、生活の場での「ご本人様のできる事を増やす或いは維持する事」との観点より、介護福祉専門職等や社会福祉職等様々な方との連携も肝要と思量します。「社会的存在としての人間」との思考の下に障害当事者として話したく存じます。

略歴 ● 齋藤 直希 (さいとう なおき)

「昭和 48 年に脳性麻痺による四肢麻痺で出生。障がい判明後、母の甚大な協力のもと、上山、ゆきわり各養護学校で義務教育を受け卒業。その間、毎日新聞社他主催・文部省他後援協賛の「第 33 回青少年読書感想文全国コンクール」で山形県最優秀賞を受け同全国大会で「中学校の部 全国学校図書館協議会長賞」を皇太子・同妃両殿下（当時）御臨席の下、受賞。その後、山形中央高校を皆勤で卒業し、平成 4 年 3 月 14 日付朝日新聞の天声人語に掲載。山形大学人文学部法学科進学、行政書士有資格者となり卒業。卒後、普通学校等を目指す後輩を含め逐次講話。母の脳梗塞発症後は社会の支援を得ながら知識を生かし母を守りつつ、障がい児者の社会参画について活動。政策研究ネットワーク山形・運営委員（平成 30 年度）。